

トムヤンティ『クーカム』(メナムの残照) 再考

ロマンスの背後にみるタイのジェンダー観、国家観

平松 秀樹

1 はじめに

日本では『メナムの残照』のタイトルで知られる小説の原題は『クーカム(Kuukam)』である。日本では、訳者の西野順治郎があとがきで書いていることもあり[トムヤンティ 1978:371]、タイ語の「クーカム」には「運命の相手」という訳をつけることが一般的となっている。しかし原語に忠実に従うと、「クー」はカップル、「カム」は業であるので、「クーカム」は「業の2人」あるいは「宿業の相手」となる。

残念ながら、この言葉そのものには「運命の相手」という言葉が醸し出す少なからず甘くロマンティックな香りはない。西洋風の赤い糸のイメージもない¹⁾。タイ語における「クーカム」は、前世の因縁によって今生で苦しみを受けなければならないカップルを想起させる、極めて仏教的な響きを含んだ言葉である。しかし、タイの古典文学作品と異なり、この現代小説では前世の因縁が具体的に語られることはない。何の宿業かはわからないが主人公の2人が出会い、苦しみに満ちた愛を抱く。この場合の2人を結びつける機縁は、戦争すなわちタイ語で言うソンクラーム・マハー・エーシア・ブーラパー(大東亜戦争)である。

『クーカム』の原作者はトムヤンティという女性である。トムヤンティは1937年にバンコクに生まれ、タマサート大学の法学部に入学したのち商学部へ転部し、名門セント・ヨセフ・コンヴェント校の教師となって大学を中退する。幼少の頃から母親に読書の手ほどきを受けるなどして文学的才能を育み、14歳の頃に短編を書き始めて雑誌に掲載された。19歳で初の長編小説を書き、その後、教職を辞してタイでは数少ない職業作家の道に入る。トムヤンティは膨大な恋愛長編小説を出版しており、『クーカム』はその一つにすぎ

ない。他にも『タウィー・ポップ』²⁾など映画化・テレビドラマ化されている作品は枚挙にいとまない。

文章は独特な「トムヤンティ節」とでもいうべきものを確立しており、タイ語を学んではいるものの筆者のような外国人には意味が判然としない部分も多い。表現の繰り返しも多く、話が冗長だと感じる箇所もある。しかし作品全体の雰囲気ですべて、知らぬ間に読む者に感動を与えるのである。

『クーカム』は雑誌『シー・サヤーム』(麗しのシャム)に1965年から連載の形で掲載され、1969年に初版が上梓された。その年のうちに再版され、その後、出版社を変えながら版を重ねている。

邦訳の『メナムの残照』は、古典文学の引用フレーズや最後の火葬の場面などを適宜省略した角川文庫版(1978年)が初出であり、その後大同生命国際文化基金から「完訳版」³⁾(1987年)がでている。日本語訳者の西野順治郎は1973年の映画を見て翻訳を思い立ったとあるが[トムヤンティ 1978:371]、西野が見たのは香港との合作によって最初に映画化されたバージョンである(それ以前に2回テレビドラマ化されている)。

メーナムとは川という意味だが、古い世代の日本人はチャオプラヤー川⁴⁾をメナム川と呼んでいた。ち

2) 日本での映画公開タイトルは『アナザー・ワールド』。

3) 訳者は「完訳版」としているものの[トムヤンティ 1987:下320]、訳をとばしている箇所がかなり散見される。また、この物語を理解するのに肝要と思われる仏教的表現なども訳されていない。のちにアジア文庫から出た合冊版には、訳文はそのままであるが、1988年版映画のスティール写真が挿入されている。

4) チャオプラヤーは、位階の「正一位」とでもいった意味で、かつて貴族階級の最高位にも使用された。この川は、バンコクからアユタヤまでの輸送の動脈としても重要で、現在でも小舟が米を積載した巨大貨物をゆっくりと牽引している姿を目にすることがある。

三島由紀夫の小説で有名な暁の寺(ワット・アルン)はチャオプラヤー川に面していて、王宮付近に位置する。その対岸には伝統マッサージで有名な涅槃寺(ワット・ポー)がある。

ちなみに暁の寺を守護する夜叉と涅槃寺を守護する夜叉が争いを起こす伝承があり、『クーカム』のなかでも言及される。➤

1) soul mateならばタイ語で「ヌア・クー」という言葉が存在するし、ほかに「クー・テー」(real partner)や「クー・チーウィット」(life partner)といった「運命の相手」を指す言い方もある。

なみに映画『クーカム』の英語タイトルはThe Sunset at Chaophrayaで、邦訳タイトルに近い。この作品を日本にいち早く紹介した『メナムの残照』の意義は大きいが、西野による他のタイ小説の翻訳と同様、誤訳が多いのが残念である。たとえば女性主人公の元恋人ワナット (Vanat) はワナスと記されている。ワナットはローマ字転写ではVanasとも翻字できるので、英語の下訳があり、それをもとにして日本語に翻訳した可能性も考えられる。もっとも、具体的な参考文献は記されていないので訳出作業の詳細は不明である。

また、西野訳はナム・プリック (唐辛子を主素材としたペースト) を「胡椒」と訳す癖があるなど、読むにはそれなりの注意を必要とする。しかし、だからといってこの翻訳を世に出した意義が薄れることはあるまい。タイの文学や映画のなかでも『クーカム』は日本でかなり知られており⁵⁾、それも西野訳があったからこそだと言える。

トムヤンティは、その圧倒的な知名度に比して、文学界での評価はそれほど高くない。メロドラマ作家とする向きが一般的で、作品に本格的に取り組んだ研究論文も少なく、進歩的知識人からは「腐った水」(ナム・ナオ) の文学と批判されたこともある。思想的には極めて保守的で、1976年10月6日の反動クーデタ時には学生運動を批判する役目を果たし、国政改革評議会議員にも任じられた。保守派の婦人クラブの世話役などもこなす [平松 2008]。

本論では、原作の小説のみならず映画やテレビドラマ版等も視野に収めたうえで、『クーカム』における主人公コボリを始めとする登場人物の表象の持つ意味を再考したい。また、今まで触れられることのない

その話を聞いたコボリが日本にも日光の伝説があるとお国自慢のように切り返すシーンは、コボリの人柄が表れ、とんちんかんな感じが出ていて面白い。戦争中の悲恋という深刻なストーリー進行の中で、いわば能における狂言のごとくのインターバルであろうか。

その他、タイにおいては川にまつわる様々な伝承・伝説があり、なかでも特に有名なのは、多くの美女の愛人を持つ好色のワニ王が退治される話であろう。退治する青年も実は女好きだと判明するのは大変気になるところである。

両伝承とも、『ウルトラ6兄弟VS怪獣軍団』でおなじみのソムポート氏が実写映画化している。

5) 最新映画ヴァージョン (2013) がインターネットの動画配信サービス「ニコニコ動画」にも日本語字幕付きで出てくることを確認できる (2020年2月時点)。西野訳という土台がなければそうした日本語字幕を入れる好事家たちも現れなかったであろう。

かったロマンスの陰に隠れてしまったメッセージについて考察し明らかにしたい。最後に、コボリの内面ははたして本当に日本人なのかについて追考し、異人種間ロマンスの観点からも述べることにしたい。

2 『クーカム』の登場人物と物語に見える トムヤンティの理想と価値観

『クーカム』の主人公は、日本人海軍大尉のコボリとタイ人女子学生のアンスマーリン (太陽の意。ニックネームはアン) である。コボリは一休さんと並んでタイでもっとも人口に膾炙した日本人の呼称であることは他の論考で指摘したが [平松 2013: 139]、『クーカム』を知らない人をタイで探すのは難しい。それほどの人気を誇る作品ではあるが、タイ人であっても原作をきちんと読了している人がどれだけいるかは甚だ疑問である。『クーカム』の現在の知名度は、その多くをテレビドラマ版や映画版に負っていると思われる。テレビドラマ化は6回、映画化は4回されており、ミュージカル化もなされている (附録参照)。ミュージカルを除き、主人公コボリ役は全てタイ人俳優が演じている。

一つの作品が繰り返しドラマ化・映画化されることはタイでは決して珍しいことではない。同じように文学作品を原作とする『古傷』(プレー・カオ)⁶⁾ や『サーイトーン邸宅』(バーン・サーイトーン) などに見られるように、人気作品は何度も映画化・テレビドラマ化される傾向にある。しかしながら、『クーカム』は日本人を善的ヒーローとしている点で他の作品と異質である。近代以降のタイの文学作品あるいは映画のなかで、外国人のヒーローが人口に膾炙するレベルまで有名になったものとしては、ビルマのバイナウン王 (タイ語での呼称はブレンノン) を主人公とした『十方勝利者』(プー・チャナ・シップティット) が挙げられる。しかし文学愛好家などを除き、巷の人々にとってブレンノンはコボリの比ではない。原作では、どちらかを取るならアンスマーリンが上位の主人公のはずだが、映画等でのコボリのキャラクターが際立ちすぎて、印象度が女性主人公を上回ってしまったといえる。

6) 日本での映画公開タイトルは『傷あと』。

2.1 優しく、一途に女性に尽くす 理想的な日本人好青年・コボリの造形

今やタイでは日本人好青年の代名詞ともなっているコボリは、原作のなかでは公明正大で優しさと節度も兼ね備え、かつ規律に厳格な日本軍人として描かれる。最初のアンスマーリンとの出会いの場面では、「口もとの引き締まった、細長い目をした色白の男で、髪は学生のように短くしていた。彼女の驚いた姿を見て、男は笑って白い歯を見せた」[89 | 上85]⁷⁾と描かれている。

管見の限りだが、海外(日本以外)の文学・映画において最も好意的なイメージを持ち合わせた日本軍人は、コボリではないかと考える。同じタイを舞台にした映画で、早川雪洲が冷酷な日本人大佐を演じて有名な『戦場にかける橋』を持ち出すまでもなからう。また、近年のスピルバーグ監督『太陽の帝国』の比較的柔らかな日本兵表象も出てきているし、サムライ・イメージにまで拡大して『ラスト・サムライ』などにおける好印象の日本人表象を持ち出したとしても、いずれと比較してもコボリの立派さは際立っている。まして『クーカム』のコボリは、他の作品でのように脇役ではなくストーリーの中心に位置する主人公である。

コボリは日本軍司令官の甥で、アンの家近くの建設された日本海軍造船所の若い所長という設定になっている。軍規律に従ってガソリン泥棒⁸⁾にガソリンを飲ませて処罰するコボリに対して、アンは「日本軍にはわれわれタイ人を処罰する権利はない」[108 | 上101]と果敢に詰め寄る。コボリは、アンの上に無断で入ってバナナを盗んで果樹園の木を荒らした部下の日本兵も公正公平に処罰する。「あなたのような残忍な人間は見たことない、自分の部下にまで」、「あんな凶悪な民族の血を引く奴に、何言っても無駄だわ」、「顔は肉でこころは虎[慈悲の面をしているが中身は残虐の意味]」と罵倒する娘に、アンスマーリンの母は「だけど、彼のしたことは正しいとお母さんは思うわ。……もし彼が自分の部下を処罰しなかった

ら、お前はまたタイ人だけに権力をふるうのかと言って騒ぐでしょう」と諫める。娘は「あいつ、大嫌い」と悪態をつき続ける[122-123 | 113]。

コボリのモデルは、一般では、タイ駐屯軍司令官の中村明人中将(1943年着任)となっている。中村中将は日本でも『ほとけの司令官』(1958)という本で知られる。トムヤンティは、軍人の父から聞いた日本軍司令官の中村明人の話を元に、幼いころ見聞きした日本兵との経験も交えてコボリを造形したとされている。子どもの折の実体験でも日本兵に悪い印象は持たなかったらしい[吉川 2010:17]。しかし、父親から作者に語られた漠然とした中村司令官のあのイメージ以上の具体性はなく、作家としての想像力でそれを大幅に拡張してコボリを造形したと思われる。

ナ・バーンワンナカム出版の2001年版に、「出版社によるまえがき」として興味深い解説がある。それによると、1965年頃にカンチャナブリで連合国軍共同墓地を訪れた時、ある墓石に献花とともにカードが添えられているのを作者は目にした。死んだ男性と、その人のことを思いながら花を供えた女性の悲しみが頭をよぎった。遠く離れた国から、陽光さす国すなわちタイの国へとやってきて無念にも死んでしまった男性と、生き別れた女性。たちまちインスピレーションが湧き起こってコボリの造形へと至った[トムヤンティ 2001:頁の記載なし]。

カンチャナブリは『戦場にかける橋』に出てくる泰緬鉄道のクワイ橋(タイ語ではクウェー)でも有名で、戦争博物館もある場所として知られる。そこにある連合国兵士の墓場で、敵方である日本軍人を主人公として想起する作者の想像力は超絶である。日本人を相手に据えた方が、西洋人の主人公よりもタイのロマンスとして読者に受け入れられるとの作家の直観であろうか。別の観点から解釈すれば、国籍を問わず戦争の犠牲になったもの全てへのレクイエムという作者の心情とも受け取れる。

コボリは、いくらヒロインに嫌われ足蹴にされても一途に尽くす男性で、愛のため時には軍人として失格である行動もとってしまう。敵対する連合国軍の捕虜をアンが家に匿っているにもかかわらず見て見ぬ振りをし、その結果逃亡を許してしまう場面さえ見られる。コボリの優しさは、毛嫌いするアンにさえ「背が高く頑強で、いつも楽しそうな微笑みを浮かべ、細長

7)『クーカム』のテキストはナ・バーンワンナカム出版の2001年改訂版を使用した。引用は筆者の訳により、ページ数のみ「|」の左側に示す。翻訳に際しては西野訳も参照し、1987年版の対応ページを「|」の右側に付した。

8) 私見だが、日本軍のものを盗むことは割と簡単にできたようだ。ある時、バンコクでタクシーに乗った際、運転手が筆者に、自分の母が昔日本軍から色々な物を盗んだと、こちらが訊いてもいないのに語ってくれたことがある。

く黒い目は自分の周囲のものを全くの善意でみているようだ、「軍人たちの指揮官というよりは、無垢な少年のようだ」[154 | 上140-141]と感じさせる。

アンは、コボリが目の前で生け花をしてみせた時、日焼けした顔、頑強な腕で軽く花の枝をいじる姿に驚きを感じる。コボリは三味線や生花を能くするが、「日本人は生け花、家事、炊事は、男性へ尽くすべき女性の義務と考えています」[161 | 上147]とアンに説明する。そうした女性の義務をコボリが行う場面を描くことで、作者はコボリを一般の日本人男性とは一線を画す男性として造形している。家事もできる万能の男性を理想像とシタイ人ヒロインの相手として設定しているのである。しかしだからといって強さも兼ね備えなければ男としてはだめで、「コボリは炊事、生け花、音楽など、女性と同じようにいろんな優れた才能を持っているが、反面立派な軍人でもあります」[162 | 上148]とも友人の軍医に言わせている⁹⁾。

2.2 誇り高く気丈で、自由を求める愛国者 アンスマーリン(ヒデコ)の造形

ヒロインのアンスマーリンはプライドが高く気性の激しい女性として登場する。最初の出会いの場面では、英語ができないふりをしたために後ろに蛇がいるとコボリにからかわれ、仕返しに水を掛けて逃げたあとで水面に浮かんで息をするその姿は、「まるで心の中の憎悪を一気に吐き出しているかのようであった」[91 | 上86]と表現されている。

アン性格については、意図的に強い女性に育ててきた母や祖母でさえ後悔する。祖母は「アンは強情な子だがあの子のせいではないよ。あのような子に育て

9)ただし1995年版の映画『クーカム』では、コボリに実は待つことは女の務めとして彼の帰りを黙って待ち続ける婚約者が日本にいるという脚色がされている(附録参照)。映画版では、コボリは親が勝手に決めたとはいえ日本に婚約者がいるにもかかわらずアンに好意をよせるのである。さらにその映画では、コボリの家庭は極めて家父長的で、父の言うことが絶対で、母には何の権限もなく、妻の務めは夫に尽くすこととされている。1995年当時の製作者側の日本イメージとして注目に値する。

また、日本人イメージとして小説では、コボリが「日本人は辛い物を食べないので淡白ですが、……言葉を好み、真実を好み、怒りや憎しみを好み、決して心に秘めない民族です」[163 | 上149]という件があるが、これには違和感を覚え、作者の誤解ではないかと思う日本人も多いだろう。それともタイで作者が目にした日本人は喜怒哀楽が激しかったのであろうか。日本人男性がタイなど東南アジアに行くと、西洋での萎縮した行動とは真逆に人に接する態度や声が尊大になる傾向があることは周知の事実である。

たわたしとお前が悪いんだよ。アンが幼い時叩いてしかっても大声で泣くこと許さなかったのを覚えているかい。そうやって躰けられた性格はなかなか変えられるものではないよ」[147 | 上133]とアンに語る。「女としての優しさ柔らかさをもたない意志の強すぎる子になっているが、いつかは困ることになるかもしれない」(同)と心配する老婆の予言は後に的中することになる。

母や祖母がアンをプライドの強い子に育てたのは、母の失敗の轍を踏ませないためでもあった。アンは、菓子やバナナの売り子をしていた時に若いタイ海軍士官に見初められ、新郎側の出席のないまま結婚式をして娘を産む。その直後、夫である海軍士官の5年間のイタリア留学が決定する。必ず彼女のもとに帰ってくると約束するものの、帰国後、アンは離縁され、彼は親族の用意した名門の女性と結婚させられる。アンは自分が捨てたアンやアンに対して罪悪感があり、アン教育の面倒を見ると申し出るが、母は断る。それ以後、アンは父の新しい家庭の人々に蔑まれないように精いっぱい生きてきたのである。

名門出の新しい妻とその娘(アン義妹)たちはアンを徹底的に見下し、まるで「奇妙な動物」でも見るような目でアンを見る[458 | 下5]。現在のタイでは義姉妹の間でも仲の良い例が多くみられ、後妻が前妻の子と仲良く付き合っていくことも珍しくない。なぜアン義妹たちはそこまでアンを毛嫌いするのであろうか。この場合は義妹たちの母親が名門出という背景が影響していることが一因として挙げられるだろう。上流階級の人々が庶民の娘を徹底的に見下すのは、タイの文学・映画ではよく見られる設定である。タイは社会的地位・階級を気にする社会¹⁰⁾で、テレビドラマでは息子と結婚しようとする下層の娘を徹底的に馬鹿にするようすが描かれることが多々ある¹¹⁾。

家庭は裕福ではないながら、アンは大学に入学し日本語を学んでいる。直接の記載はないが、通っているのが最高学府のチュラーロンコーン大学の文学部であることが、場所から判断できる。作中で描かれるア

10)たとえば、書類で名前の前に王族の称号やDrなどをつけないと遺憾とされる。以前筆者も、大学のレポートに歴史小説『アイヴァンフォー』の作者サー・ウォルター・スコットのSirをつけない記述をしたときに注意を受けた。外国人の階級・称号にも厳格さが求められる。

11)前述の『サーイトーン邸宅』がその好例である。

ンの家の目と鼻の先の場所にはトムヤンティが学んだタマサート大学も存在するのだが（日本語専攻課程もチュラーロンコーン大学に先駆けて開設）、作者はあえてそこではなく別の大学に通う設定にしている。

アンの築いてきたプライドは恋愛にも顔を出す。「男は皆同じで、嘘をつく」との信条を持つアンは、堅物として、親しい友人たちにも「あの大理石の人形のようにきれいな娘は、人間味に欠ける」との陰口をたたかれる[52 | 上55-56]。幼馴染で恋人のような存在のワナットに5年間のイギリス留学が決まって求愛（求婚）されても、快くは受け入れない。母の事例が彼女にも繰り返されることを恐れているのである。待つことは女にとって不利に働くと考えるアンは、決して母親のような立場に立とうとしない。「わたしのよう貧乏な娘に自分を縛りつけるのではなく、もっとよい女性を選ぶ機会をもってもらいたいよ。……母と同じようには苦しみたくないの。わたしはあなたに空虚な結婚の約束のために自分を束縛してほしくないの」[52 | 上56-57]と本当は自分が束縛されたくない気持ちをワナットのことを思っていることだと転嫁するアンに対し、彼は5年後もアンを思う気持ちは変わらないと答えてイタリアへ行く。ワナットも白い歯¹²⁾を持つ二つ年上の背の高い好青年で、アンが通う大学の工学部で学ぶ、果樹園の資産家の子息でもある。

物語のなかで、アンはコボリに内心は魅かれながらも、冷酷に接する。日本軍人というだけで理不尽ともいえるほどに徹底して敵視する。「近くによってもらいたくない。とにかく、あいつは日本人、好きになれない」[96 | 上91]。日本軍が上陸してビルマ制圧のためにタイを通過することを可能にする条約（攻守同盟）を半ば無理やり押し付け、一部地域で小競り合いなどの事実があったが¹³⁾、アンの言動は反日本軍の急先鋒である¹⁴⁾。

アンは「小柄で、漆黒の長い髪、大きな黒い瞳」[3-4 | 上14] が特徴的な女性であり、当時のタイ的な

ヒロインの範疇に入るであろう¹⁵⁾。住んでいる家も川の畔にある高床式のもので、タイの伝統家屋である。

2.3 すれ違い、結ばれない二人の結末が示す タイの伝統的価値観と国家間関係

アンとコボリは、常にボタンの掛け違いが続く。連載小説のため、読者の興味を持続させるためでもあろうが、メロドラマにありがちな、勘違いによってハラハラするすれ違いが描かれる。結局、アンの恋愛が成就しないのは、母の轍を踏むまいとして別の陥穽に落ちてしまったということであろうか。前述のようにワナットに対しても女性の自由を強調する。コボリに至っては、母や祖母の忠告も聞かず、敵対国にもかかわらずコボリがいい人だという脱走西洋人のということも聞かず、長年親しくしている日本語も教えてくれた歯科医であるヨシダ医師の助言にも耳を貸すことはない。これは、強情を張り続ける女性は結局不幸になるという観念の反映であろうか。面白いことに、女性は自分から愛の態度を表してはいけないという点においてはタイの伝統的価値観に合致している。

太陽を意味する名を持つアンスマーリンは、コボリによって陽子か日出子か迷った末にヒデコという日本名をつけられる。日本人への反感と同時に、極度の国粋主義的な価値観を持ち合わせているアンは、勝手に名づけられた日本名に当然拒否反応を示す。ここでトムヤンティの腕が冴えているのは、アンの母がコボリという日本名を覚えられず、ドーク・マリ（ジャスミンの意味。タイ語での発音のコー・ボリとイントネーションが似ている）と呼ばせる設定をしている点である。アンをヒデコ、コボリをドーク・マリと平行線的に呼び合うのは、非常時において異国と相互理解を通わせることの難しさの象徴ともなっている。

それに対して音楽は人類理解の普遍の道具として登場する。アンは物思いに耽る時、キムという楽器を奏でる¹⁶⁾。アンはコボリの弾く三味線の音がキムの音

12) 新世代のヒーロー・ヒロインは歯の白さが強調される。旧世代は、アンの祖母にみられるようにピンロウジを噛むために歯がどす黒い朱に染まる。

13) 条約締結前の12月8日にタイ南部に進駐しようとする日本軍に備える様子が、映画『少年義勇兵』で描かれている。また、タイ人の眼からみたカンチャナブリに進駐した日本軍の脅威が、サクチャイ・バムルンボン（セーニー・サオワボン）の小説『地、水そして花』（吉岡みね子訳）に描かれている。

14) 中村中将の回想録によれば、日本軍によるピンタの悪弊と列車内等での兵士の裸姿（禪姿）が一般のタイ人の反感を最も買っ

たそうである[中村1958:52-53]。明治期に來日した外国人たちが日本人の禪姿に激しく驚いた記述を残していることはよく知られている。ところで、強い反感を買ったピンタではあるが、興味深いことに、現在のタイのテレビドラマでは、女性同士が相手の顔を平手打ちする乱闘シーンがしばしばみられる。

15) 時代設定が現在のテレビドラマや映画にみられるヒロインは背が高く、西洋的雰囲気的女性も多い。

16) キムは伝統楽器の一つで日本の琴に似ているが、本来は中国の楽器であり、タイ伝統音楽のアンサンブルには使われない。これは少し不思議である。タイを代表する純粋な伝統楽器と言

に近いと思い、コボリもアンの弾くキムが三味線の音色に近いと感じて魅かれる。音楽だけが2人を確実に結びつける紐帯であるかのようだ。言葉を必要としない世界共通語なのであろう。音楽の時だけが、戦時の中での男女の対立という緊迫したストーリー展開の中で、心温まる静寂のひと時となっている。アンは日本の曲を弾くことさえある。キムを弾くコボリ、2人の笑い声、アンの母もまたそこに幸せを感じる [640 | 下161]。しかし空襲のサイレンがそれを打ち壊し、緊張した世界へと戻っていく。

やがてアンはコボリと政治的な理由により結婚させられるが、結婚後妊娠しても自分の意地のためにお腹の子さえ犠牲にすることを厭わない。わざと家の階段から落ちて墮胎未遂する場面もある。仏教的にいえば、あらゆる生き物を殺すことは悪業を積むことになる。ただし、その時点で結婚して夫になっていたとはいえアンの同意なくコボリが「レイプ」してできた子であるので、アンがお腹の子の命を奪おうとする行動を他者が一方的に非難するのは軽率だろう。

すでに結婚以前より「結婚しても憎みます。子どもができて、あなたを憎むことを教えます」[434-435 | 上393-394] とコボリに宣言していたアンは、脱走捕虜に素直になってコボリを愛するように諭されても、意地でも言うことをきかない。「あの人の愛情は、苦しみ以外に、何か私から報いを得ただろうか」[560 | 下95] といった内省も一応はするものの、すぐにまたもとのように態度を硬化させる。しかし、冷酷に接する一方で、結婚後も自由の身を約束してくれたコボリに「どうして彼は永久に束縛してくれないのだろうか」[629 | 下152] といった身勝手な面も示す。心情の振幅が激しく、「ワナットをまだ愛してはいない。ただ待っているといっただけだ」[369 | 上336] と自分に言い聞かせ、コボリに向かう気持

えば、まず思い浮かべるのはラナートであろう。しかし、ラナートだと楽団編成イメージが強くなり、大仰になりすぎて家の部屋で一人でひっそりと弾く設定は難しい。しかもラナートは伝統的に男性が演奏することが多く（近年は女性も見られる）、男性奏者をイメージし易い。トムヤンティは、そうした意味でのジェンダーの転換には挑戦的ではなく、純タイではない楽器でも等閑に付したのであろう。ちなみにアンが弾くのは二種のキムのうちキム・ピースアという小ぶりの方の楽器と思われ、日本の琴と異なり、鉢のようなもので弦を叩いて音をだす。コボリは、音色が三味線のようなのだとあって、アンがいなくなるときに勝手に演奏して彼女に叱られる。

ちを正当化する場面もある。

一方のコボリは、たとえどんなに忌み嫌われようと、アンに「お父さんには男の子がほしいと申し上げました。節句には小さな鯉のぼりを立てて祝いたい」[611 | 下134] と言うほど、どこまでも無邪気な好青年ぶりを示す。

結婚後もコボリへの反感は消えず、ワナットの自分への思いを気にかけていたアンだったが、墮胎未遂を乗り越えて無事に子どもを宿すと、ワナットの面影は着実に遠のく。お腹の鼓動に感動さえ覚え、コボリに詫びたい気持ちが芽生え、初めて「優しい」気持ちになる [756 | 下259]。アンの気持ちに変化が現れたのと同時進行的に、セーリー(自由)・タイ¹⁷⁾に加わりパラシュート部隊としてタイに降下してきたワナットに会う機会があり、話し合いをした結果、長い間の戒めから解放される。「これからは自由(イッサラ)の身、好きな人を愛せる」[768 | 下269] と声高に「コボリ」と言いながら駆け出していく。しかし時すでに遅く、これ以降物語は不幸な終局に向って急降下していく。

結婚後もその身のイッサラ(自由)をコボリに突きつけ、コボリとワナットの間で最後まで揺れ動くアンは、有名な古典文学『クンチャー・クンペーン』¹⁸⁾で2人の男性に翻弄される主人公ワントーンの系譜を引くものであろうか。ワナットが身を引き、形としては捨てられた恰好のあと、手のひらをかえしたようにコボリを追いかけるが、後の祭りであるのはメロドラマの定番である。連合国軍の空爆を受けて瀕死のコボリに、「自分のこころと闘ってあなたを愛さないようにすることがどんなに苦しかったか、わかってもらえますか」[813 | 下304]、「わたしはいま自由の身となりました。わたしには愛する人がいても他のだれも愛さないと、世界に宣言することさえできます」[814

17) 自由タイ運動は、日本軍がタイに進駐し表向きはタイは日本と同盟国になったのに抗し、裏では連合国と連携した抗日地下活動。海外では駐米公使セーニー・ブラーモート、国内は摂政のプリーディー・パノムヨなど大物が組織の中心にいた。詳しくは市川 [1987] を参照されたい。

18) 『クンチャー・クンペーン』はタイでもっともよく知られた文学作品の一つ。スパンブリー地方を舞台にしてアユタヤ朝時代より口承で伝わっていた物語を、ラッタナコーシン朝(現王朝)のラーマ2世が文章として編纂させた。禿げ頭だが実直で金持ちのクンチャーとハンサムだが浮気者のクンペーンの間でヒロインのワントーンが翻弄される。最後に国王に選抜を迫られるが、どちらにも情があり選ぶことができず、処刑を宣告される。抄訳が富田 [1981] に所収されている。

「下306」と、いまさらながら告げるのである¹⁹⁾。

二人が出会った場面での船上のコボリと水中のアンスマーリンに暗示されるように、構図としてはコボリ(日本人)がアン(タイ人)を見下ろす上から下への視線が話の前半に描かれるが、この関係は最後に逆転する。死にゆくコボリを抱えたアンの顔がコボリの顔を見下ろしているのは偶然ではなく、最後に国の力関係と男女の力関係を同時に逆転させている。タイという土地で散っていく日本兵。タイ人女性の腕の中で死んでいく日本人男性。しかし作者はジェンダーとしての男女の力学の本質的転換を目指しているわけではなく、「女の腕に眠る男」、「男はいくら強くても最後は女性の母なる腕の中で子どものように眠る」というメッセージであろう。背の高い連合国の脱走捕虜を平らな棺桶に寝かして連れ出すのも、連合国軍とタイとの上下位置関係を逆転させる構図の延長上とみなすのは考えすぎであろうか。

2.4 「仏教的善」を体現する母親と許されてしまう無責任なエリートの父親

アンの母は、イギリス人脱走兵捕虜を匿うにも「同じ人間なのだから助け合わなければ」[294 | 上268]と考える仏教的善の体現者である。ナム・ナオ(メロドラマ)といわれる女性作家の作品において仏教的善は他の分野の作品以上に必須アイテムとなっており、欠くと読者の安心を損ねる可能性もある。

アンの母親については、作中で常にこうした仏教的善に基づいた冷静な言動をする姿が描かれる。コボリについて、「あの若さで兵隊にとられ、故郷を離れて国を離れ。死んでしまっても、親兄弟は知らないままかもしれないのに」とアンスマーリンの母が語る声は、作者トムヤンティが連合国軍墓地で物語の着想を得た際に去来した感慨そのままである。他方で、「お母さん、憐れむ必要はないわ。自分らは勝利者で、わたしたちに何でもできると思っているのだから」[95-96 | 上90]という娘アンの声は作者のもう一つの声でもあろう。また、「お互い何の怨恨も持たない者どうしが戦うことになり、殺しあうなんて」と語る母

に、「そして関係のないわたしたちも爆撃されるのよ」[211 | 上191]と返すアンとの会話は、作者に限らず多くの人々の正直な気持ちを表しているのだろう。

また作者はアンの口を借りて「もしわたしに神通力があれば、やつらを目の前でひとり残らず死なせてやる」と仏教徒とも思えない過激なことも言わせるが、それに対して母親に「人間には、完全な悪人も完全な善人もいない。だれしもその二つが入り混じっている。その時の必然によってどちらか一方の面が出ているにすぎない」[99 | 上94]という人間観を黙考させている。

アンの父は、表では日本と友好を進める軍人高官であり、裏では連合国側と結んだ地下組織セーリー・タイの重要人物である。典型的なエリート・タイ人男性の表象と思われる。浮気性というほどのことはないものの、恋愛に責任はとらない。親族のいうことに逆らえずにアンの母親を捨てる。しかし、彼は家の命令の犠牲になったということで免罪されている。ワナットもアンに「お父さんを嫌ってはいけないよ。お父さんだって人間だ。人間には常に間違いはあるよ。どういったってお父さんは君を愛しているのだから」[33 | 上38]と言う。登場人物の誰一人としてアンの父を厳しく非難するものがいないことは注目に値する。実際のタイ社会でのエリート男性の行動を髣髴させる。決して良いことでないのは了解済みだが、その行為は社会的に許容されてしまう。

アンも、直接父の悪口を言ったり責めたりすることはない。アンの母が「最後は涙で別れたが、彼女が愛情というものを知った最初で最後の人。娘の父でありながら、こころの拠りどころとはならず、大事な問題の決定に何一つ協力してくれず、彼女が一人で父母両方の役をなさなければならなかった」[428 | 下389]と吐露する姿は、同じ境遇にある現実のすべてのタイ人女性を代弁した訴えにも聞こえる。それでも社会的に断罪されるわけではない。そんな一般の無責任なエリート・タイ男性を改変することはどうしたところでもできないといった無力感から、日本人の姿をかりたコボリが生まれてきたのであろうか。そしてコボリの魂には期待を込めて、全きにおいて責任観の強い理想の男性像が注入されたのだろうか。中身は日本人というより理想のタイ人を表象していると考えられることについては後述したい(第4節)。

19) こうした一見どこにでもあるメロドラマが国民的な作品として至上の位置を現在占めているのは、作者の筆の力もあろうが、飛ぶ鳥を落とす勢いでスターダムを駆け上っていたトンチャイ・メッキンタイ主演のテレビドラマの影響も大きい。この作品を同じように戦場で男性が先に死ぬ『風と共に去りぬ』や『誰がために鐘は鳴る』と比較考察してみるのも興味深い。

2.5 善良でも外見は冴えず、残酷な一面を持つ ——日本人の描かれ方

日本兵の表象として、コボリ以外の日本軍人の容貌は惨たんたるものである。外見のイメージはハリウッド映画の『ティファニーで朝食を』の日本人像とも通じるものがある。軍医は、コボリの親友で、祖母のマリアも無償で治療するなどアンの一家を助ける善良な人に描かれているが、「背が低く、小太りで、度の強いメガネをかけた」[131 | 上120]と描写されている。軍医が最後の場面で瀕死のコボリを助けずに敬礼して去っていく図は、一見冷酷だが、作者がよく勉強していることを物語る²⁰⁾。アンに日本語を教えて何かとアンの将来を気に掛けるヨシダ医師も、同じように背が低くずんぐりとしてメガネをかけた温厚なお人よしに描かれている。その他の一般の日本兵に悪いイメージを付与するのを忘れてはいないし、一部の日本兵が猥褻であるとするのも忘れていない。

また、コボリに対してさえ細長い目をした日本人の微笑みは不可解なものとしているのは、ハリウッドの日本イメージと同視線である。アンに素直にコボリを愛するように告げた連合国の脱走捕虜にも、「捕まれば、サムライ剣法の生身の実験材料にされる」[321 | 上293]と日本軍の残酷さを強調させている。こうしたあとで、ガソリンを飲まされた仕返しにコボリを刀で切りつけ大けがをさせた道化役のタイ人登場人物をして、「日本野郎とはどうもみな相性が合わないが、奴だけは別だ。タイ人でなく日本人であるのが残念だ」[677-678 | 下318]と言わせるリップサービスをさせている。負のイメージを中和させることも忘れない作者の筆は見事である。

3 ロマンズの裏に込められ受容された 理想の男性観、女性観、家庭観、国家観

3.1 作品にみるトムヤンティの価値観 ——外国への嫌悪、愛国と純血主義

前景ではロマンス満開の『クーカム』は、注意深く読むと、後景にトムヤンティの思想性を表していると思われる箇所がいくつもある。とくに国粹主義的な思

20) 戦場での緊急医療の原則であるトリアージでは、薬を投与すれば助かる見込みのものをまず助ける。自力で動ける者は後まわしにし、助かる見込みのないものは助けない。ここで、仏教の教えで水泥の中の三種の蓮の話を想起するのは筆者だけであろう。

想が感じられる箇所が随所に見られる。作者の主眼は抗日や反日というよりも、国粹的とも言えるほどの愛国主義と一体化した反戦だと考えられる。同じ作者の代表作である前述『タウィー・ポップ』でも、フランスの脅威によるタイ独立の危機を背景として、ロマンスに絡めて愛国が表現されている。

アンが日本を嫌悪することは既に述べたが、単純に西洋が好きというわけでもない。ワナットには「洋食は嫌です。脂っこくて、味が濃くて、本当に美味さというものがない」[22-23 | 上29]と言わせているし、アンの母も娘を西洋に行かせたくないと思っている。アンが血の純潔に必要以上にこだわっている点も奇妙に映る。アンの台詞は、一部の上流階級を除いて歴史的に外国人との結婚に抵抗がなく、逆に比較的好んできたとも思われる一般のタイ人と大きな径庭がある。

「わたしはタイ人です」、「わたしたちの古きよき伝統は、その血を外国人と混ぜないことです」[321-322 | 上294]と脱走捕虜に言い、コボリには「あなたの民族は太陽の末裔の高等民族なのだから、自国にとどまり、他人には構わないでください」、「わたしは、高等な敵国人よりもタイ国の最も下等な人と喜んで結婚します。国を盲信しているといわれても構いません」[404 | 上366]と痛烈な皮肉をぶつける。同時に、アンとコボリとの関係を疑う近所の住民にも、「そのうち背の低い小さな一重まぶたの子がうまれてくるよ」[387 | 上352]と噂させている。

アンは、コボリかワナットかで揺れ動き始めた後も、「自分は彼を愛しているのだろうか。敵であり外国人である男性を」[369 | 上336]と敵国人であることにこだわり続ける。政略結婚に対しても、「今自分の前にたっている男性との結婚が最善の方法なのだろうか。背が高く、軍人らしく毅然としていて、……他の日本人と違い鼻も整っている。しかし彼は勝利者としてタイの国土に踏み込んで来た外国人であり、そして敵である」[402 | 上363]との敵愾心が素直な心になることの邪魔をする。

無邪気で人の好いコボリが、アンに「日本に行きたいですか。僕は、日光をあなたに見せてあげたい」[237 | 上217]と言ったことに対し、「彼が自分の国

か。仏陀は、明日にでもひとりでに咲くであろう蓮、よい教えを受ければ泥中から水上に浮かび上がり花を咲かせるかもしれない蓮、教えを受けても沈むのみで池底の亀の餌にしかならない蓮の例を挙げ、教えを説くべき対象は中ほどの蓮であるとした。

の自慢話をするのがいやなのよ。彼の国がどんなにすばらしくても、知りたくも、聴きたくも、見たくもない。なぜなら彼らのせいで、私たちの国は、草木一本に至るまでめちゃくちゃにされている」[240 | 上220]と、日光三猿の表現の洒落を効かせながら、母に言う。アンは、タイの苦しみの原因はすべて日本にあると考えている。日本が進駐してタイの自由を奪い、同時にタイは連合国側と敵対することになって激しい空爆を受けるという認識である。作者は連合国の脱走捕虜に人生の格言のようなことまで言わせているが、もともと連合軍墓地で起こったインスピレーションでもあり、基本的には連合国側にシンパシーがあるのであろう。そう考えるとますますコボリという存在は異色である。

注目すべきは、作者は、日本軍人に対しては徹底的な嫌悪を表明させる一方で、タイ軍人についてはアン「私は海軍軍人の子」[5 | 上16]と言わせ、アン之母にさえ「おまえは軍人の子で、お母さんの子なのだから、弱くてはだめよ」[396 | 上360]と言わせている。タイ軍人の子であることを誇りとするのは、トムヤンティの父が軍人であることと関係があるかもしれない。トムヤンティの主眼はあくまでタイ愛国の提示であり、日本兵への嫌悪の提示ではない。アン之父にも地下活動に関して、「お父さんは国家への忠誠心のみで動いている。シャムの仏様が守ってくれるだろう」[461 | 下8]と、愛国心によって両面外交の裏工作を正当化させている。

アンは最後にワナットから解放されてコボリを追いかける。アンは自由はタイ国の自由も暗示している。アンが解放されてコボリが死に、タイは解放されて日本は敗戦するという、二重の「陽光さす国」における「落日」である。アンは愛する人を失うが、愛する国を取り戻す。愛の因は果を結ばないが、愛国の願いは成就する。

3.2 伝統的男性観・家庭観を踏まえつつ

受け身だけではなく親に尽くす女性像を提示

アンが泥酔したコボリに同意なく抱かれた後、コボリに出て行けと言いつつも、「父親から得られる安定を求める子どもの気持ちのような、彼女のこころの奥底にずっとある空虚な寂しさを満たしてくれる、不思議な安心感」[574 | 下105-106]をコボリの胸に感じている点は見逃せない。力づくで抱かれたにもか

かわらず(コボリが結婚しても何もしないとの約束を破った夫婦間「レイプ」ともとれる)、男の前では女は無力であり、女性は結局力強い男性のぬくもりが恋しいといった考えの提示であり、これが男性暴力を肯定するステレオタイプな構図として後続の作家や現実の女性にまで影響を与えることを考えると、決して看過できるものではない。

結局アンは、男の庇護を必要とし、男の力強い腕を求めているのであろうか。コボリの「広い胸、頑強な腕」の中で眠ってしまった時も、つかの間の幸せを感じている。「幾度となく一線を画そうとした人の胸であったが、苦楽のときも危険の時もいつもこの胸を探していた」[637 | 下158]。それ以前にも、コボリの空手達人の一撃によってアンは暴漢による窮地を助けられ、一瞬「ハートに触れる」[259 | 上236]。

アンだけでなく、母や祖母も、空襲が起こっても男(コボリ)が家にいてくれることで、いままでにはない安堵感を感じている。アン之母は仏教的な徳性を具現している存在であるが、男性観や家庭観に関しては極めて温厚な保守的価値観を保持している。「愛してなくても、ずっと一緒にいれば好きになつたりするもんだよ」「女は結婚したらその人に忠誠を尽くさないといけなよ、ドーク・マリはいい人だから、おまえもいつかは愛するようになるだろうよ」[454-455 | 上413]というタイの伝統的価値観が、人格者の母より娘に語られている意味は重い。「彼はいい人よ、アン。女性は、結局は結婚して家庭を持ち、よくもわるくも、優しい気持ちをずっと持ち続けなければいけないわ」[627 | 下150]と語る母の理想は、受け身の「家庭的で優しいタイ女性」と思われる。一方、祖母が「弱すぎても簡単に倒され、強すぎてもバラバラに壊される」[147 | 上133]と嘆くように、作者にとっての究極の女性理想像は自立しているが強すぎない女性であるようだ。

ただし、母は、ワナットから留学決定後に求愛された際に、彼に「選択の機会を与える」としてただ受け身に待つだけではない強い女性に育ったことを示したことを聞いて、「自分の娘であることを誇りに思う」といって安堵の胸を撫で下ろす[41 | 上45]。よき男性には従順であっても、男性の浮気性の犠牲になる女性を望んでいるわけではない。娘の留学に関しても、西洋かぶれにしたくないのと、男は異国でも根を

生やすことができるけれど女は不利で根絶やしにされてしまうという考え(諺)を披露し、男の生来の浮気性について熱弁もふるう[39 | 上43-44]。こうして、タイ人と西洋人をはじめとして男は信用ならないという諦めの地平に、浮気をしない期待を背負った清廉潔白な日本軍人コボリが、まさに旭日の如く登場し、天高く輝くのである。

また、アンは非常に親孝行である。筆者は、タイの文学やテレビドラマ、映画を分析し、そして実社会でタイ人と接して確認した過程で、一般的なタイ人にとっての最善の価値(ラテン語で言えばスヌム・ボヌム)が、仏教的な親孝行(ガタンユ)の価値観であることを確信した。『クーカム』でもアンは親孝行の価値観を身に着け、最重要の行動基準としている。ワナットの話になったときも、「お母さんを失望させるようなことは絶対しないわ。お母さんやお祖母さんに自慢できるように早く卒業証書を手にして、お金のいっぱいもらえる仕事に就くのが先決、ほかのことは今はいい」[42 | 上46]と、男よりも母や祖母が大事であることを強調している。

4 日本人の姿を借りて顕現した タイ女性にとっての理想としてのコボリ

4.1 ドークマイソットの理想男性像を継承した 寛容で忍耐強く、包容力溢れるコボリ

「ドーク・マリ(コボリ)は欠点をあげるなら外国の人ということだけで、それ以外は文句のつけどころのない」[626 | 下149]、「日本人であるという唯一の欠点をのぞいたら、タイ人と同じで、顔も性格もいい」[412 | 上373]と、アンの母も祖母も口を揃えて言う。コボリは、日本人という設定で中村明人中将の骨格をかりているものの、それは姿形²¹⁾のみで、中身は日本人とは思われない点が多い。日本人のイメージを借りているが、内面はタイ人男性の理想像ではないのか。ドークマイソットの小説『百中の一』²²⁾の主人公の判事ウィチャイ・アッタカターの血を引くタイの理想的な男性の末裔ではないのだろうか。

タイ近代文学初の本格的な女性作家であるドーク

21) 市川(1987)などによれば、中村司令官は、仁徳を具えた極めて立派な軍人であり、その点コボリと一致するが、写真で見ると、外見はコボリのイメージとは相違する。

22) 平松(2017)参照。

マイソットが描く作品の男性主人公は、寛容で忍耐強く包容力抜群で正義の人が多い。代表作として『彼女の敵』(1929)や『百中の一』(1934)などが出版されている。『彼女の敵』の男性主人公は、ヒロインのわがままで一方的に婚約を破棄されるが、忍耐強く見守り、最後には彼女を手に入れる。『百中の一』のウィチャイ・アッタカターにいたっては、瞋恚を排した仏教的善人そのものである。理想的な男性はお釈迦様のような怒らない人なのである。

ドークマイソットはのちの女性作家に多大な影響を与えている。筆者の見解では、ドークマイソットなくして現在のタイの女性文学の盛況は成り立たない。しかし後代のタイの女性作家の多くは、文章も明晰であるドークマイソットの純文学的な要素は置き去りにして、大衆文学的な話の展開の面のみを敷衍し強調拡大していった。そうした路線は現在のテレビドラマのストーリーに行き着いている。

1937年生まれのとムヤンティが、文学少女だったころにドークマイソット作品を読まなかったと考えることは難しい。とムヤンティが一時教鞭をとったセント・ジョセフ・コンベント校はドークマイソットの出身校である。意図的でなくても、とムヤンティが幼いころより影響を受けていたドークマイソット作品の『彼女の敵』の主人公や『百中の一』のウィチャイの魂を、中村明人という実在の軍人から借りた日本人の鎧姿に注入することでコボリが誕生したと考えても何ら不思議ではない。

男性主人公だけでなく、女性主人公もドークマイソットの衣鉢を継いでいると見られる。『百中の一』のアノンが主人公ではない男性に求愛されたときに答える言葉はアンスマーリンそっくりである。『彼女の敵』では、主人公マユリーがアンのように意地を張り続けたため、暴行未遂の窮地に立たされ失恋を味わう。しかしマユリーは最後に折れて幸せをつかむ。マユリーも強情だがアンスマーリンほどではない。アンは最後まで我を通したため、不幸な結末を迎える。「あなたは勇敢で、男のように強い意志をもっている。簡単に人生を決めてしまうかもしれません。でも軽率に走ると、いつかは望むものが失われてしまいます」[322 | 上295]と逃亡捕虜も忠告していたが、女性は自分を押し通すと最後は不幸というシェーマ(図式)がここにも成り立つのである。

しかし、トムヤンティの小説は、仏教的価値観や主人公の性格造形という点ではドークマイソットの範に倣い衣鉢を継ぐものの、思想的には極めて保守的かつ過度に愛国的で、反戦の思いよりもタイの国粹主義を称揚しているときさえ感じられ、ドークマイソットにはないかなりの右傾化がみられる事実は否めない。

4.2 異人種間ロマンスとコボリ

——ポストコロニアルな山田長政

最後に異人種間ロマンスと『メナムの残照』の関係について触れておきたい。日本では異人種間ロマンスとして山田長政の話が長い間記憶されている。長政とタイ人女性の異人種間ロマンスが、軍国主義の雄飛伝説に後押しされたこともあって²³⁾、独り歩きしてロマンスとして予想外に広まっていったように、『クーカム』も作者の手を離れて独り歩きしていった。結果として、タイでの日本人のプラス・イメージの形成にこれほどまでに貢献した事実に作者も驚いているというのが正直なところであろう。日本のテレビ番組のインタビューで、タイの人々に愛され親日の感情を高めることに役立っているとされる自分の作品について聞かれたトムヤンティは、「コボリが50年もの間、これほどの影響をタイ社会に与えるとは思っていませんでした」と答えている。

コロニアル時代に形成された山田長政とタイ女性のロマンス伝説と、ポストコロニアル時代に作られたコボリとアンスマーリンの神話が、直接には何のつながりもないのに日本人男性とタイ人女性との異人種間ロマンスという同種の形をとってそれぞれの国で時代を超えて受け継がれていくのは、業のなすわざであろうか。コボリはポストコロニアルな長政だとみることできるだろう。ただし、外見はサムライ・ヤマダの末裔であっても大和魂を持ったサムライではなく、憤怒の火を消し寛恕の徳を具えたタイの仏弟子の

分身といったほうがより相応しいことは既に指摘した通りである²⁴⁾。

参考文献

『メナムの残照』の使用テキスト

หมยันดี 2001 คูกรรม, ณ บ้านวรรณกรรม (Na Banvannagum Group) (トムヤンティ 2001 『クーカム』 ナ・バーンワンナカム出版)。

引用・参考文献

- 市川健二郎 1987 『日本占領下タイの抗日運動——自由タイの指導者たち』勁草書房。
- サクチャイ・バムルンポン (吉岡みね子訳) 1991 『地、水そして花』大同生命国際文化基金。
- 富田竹二郎編訳 1981 『タイ国古典文学名作選』井村文化事業社。
- 土屋了子 2003 「山田長政のイメージと日タイ関係」『アジア太平洋討究』(5)、97-125。
- トムヤンティ 1978 『メナムの残照』(西野順治郎訳) 角川文庫。
- トムヤンティ 1987 『メナムの残照 上・下』(西野順治郎訳) 大同生命国際文化基金。
- トムヤンティ 1997 『メナムの残照』(西野順治郎訳) アジア文庫。
- 中村明人 1958 『ほとけの司令官——駐タイ回想録』日本週報社(本書は村嶋英治氏によって1991年にタイ語にも翻訳されている)。
- 平松秀樹 2008 「トムヤンティ」日本タイ学会編『タイ事典』めこん、282。
- 平松秀樹 2013 「日本におけるタイ表象／タイにおける日本表象——異文化受容の前提となる相互認識を目指して」『比較日本文化研究』第16号、風響社、130-146。
- 平松秀樹 2017 「「新鮮な花」の誕生——タイ近代文学女性作家ドークマイソットの『彼女の敵』『百中の一』と時代背景」青木恵理子編『女たちの翼——アジア初期近代における女性のリテラシーと境界侵犯的活動』ナカニシヤ出版、101-130。
- 吉川利治 2010 『同盟国タイと駐屯日本軍——「大東亜戦争」期の知られざる国際関係』雄山閣。

Website

<http://dametv2.cocolog-nifty.com/blog/2014/08/bs-434f.html> (「BS朝日——いま世界は」(2014年8月24日)〈WORLD WATCH〉特集「親日感情を後押し！50年を超える人気の理由は？タイで一番有名な日本人「コボリ」とは？」に関する感想を載せている(2016年10月10日最終閲覧)。

23) 山田長政伝説の展開に関しては土屋[2003]を参照。

24) また、『メナムの残照』における日本人コボリに対して、長政伝説におけるタイ人ヒロインには、魂が込められていない。ヒロインの造形は薄弱で、単に男性主人公を補助する影の薄い添加物のような女性である。あくまでネガティブな受け身のヒロインであって決してポジティブな女性主人公ではない。『メナムの残照』とは反対に、日本におけるタイ人女性のプラスのイメージ形成にも殆ど影響を与えていない。しかし、その従属的な女性イメージゆえに、逆に、オリエンタルな毒素をふんだんに含んだ、性的官能的な南国女性という虚構イメージの構築には、大きく寄与していった。